

大毛池田遺跡93B区 S X 10、N R 02出土の遺物について

北條真木

はじめに

大毛池田遺跡は、愛知県一宮市北西部に位置し、現況では標高10m前後の木曾川の自然堤防上に広がる。東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、平成4年4月から調査を開始し、本年度の調査では、古墳時代前期から中世に至る遺構・遺物が確認された。なかでも奈良～平安時代に属する資料では、竪穴住居で構成される居住域が検出されたほか、遺跡周辺の性格を決定づけると思われる重要な発見があった。

まず出土遺物では、小片とはいえ銅製の椀蓋片が見つかった。これは発掘調査による古墳以外の出土としては、東海地方でも初めての事例である。この銅椀出土地点周辺の溝から特徴のある須恵器が多数出土し、調査が進むにつれてその性格の判断は慎重にならざるを得なくなってきた。

当該地域はこれまで古代史を検証する資料を欠いてきたこともあり、以上の成果をふまえた今後

の発掘調査への期待は大いに高まっている。そこで、多くは未だ憶測の域をでないものの、これまでの調査成果を提示しながら、若干の考察を述べてみたいと思う。

調査の概要

B区基本層序は、第1層；耕作土、第2層；暗褐色シルト、第3層；灰黄色シルト、第4層；灰褐色粘土、第5層；暗紫褐色粘土（古墳時代前期水田）、第6層；灰オリーブ粘土、第7層；灰褐色中粒砂の順の堆積を確認し、奈良から平安時代に属する遺構面は、主に第3層上位で検出した。

ただし、第3層上位では部分的に厚さ25cm程度の褐色シルト層の広がりが見られ、特に明確な遺構は確認できなかったものの、多数のピット、遺物を確認した。この層からはK-14号窯式期からK-90号窯式期に併行する灰釉陶器椀、皿、耳皿などのほか、銅椀蓋片が出土し、問題となるS X

10はこの付近の褐色シルト層を掘り下げる段階で、また須恵器を多く出土したN R 02は、S X 10直下で検出された。

以下、このN R 02とS D 10について詳述する。

N R 02（第3図）

N R 02は、幅約6m、深さ1.3mの自然流路状の溝であり、第3層中位から掘りこまれ、最深部は第7層ベースの砂層に達していた。溝は調査区西端でやや幅広となりまた浅くなってゆき、南へ屈曲する可能性も考えられる。この溝の埋土は

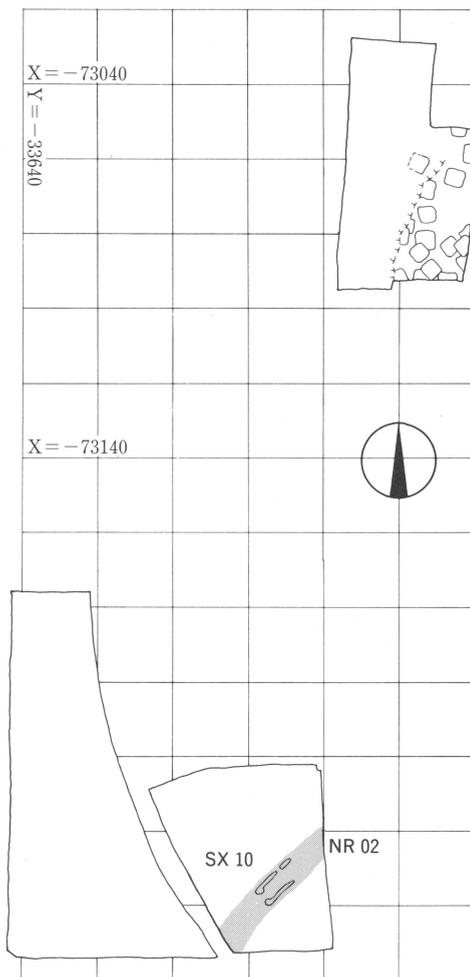


第1図 調査区位置図（1：5000）

大半がレキ混じりの砂層で、この底部に近い位置から須恵器杯、椀、蓋、甕、高杯片、土師器など多数が出土した。

1. 杯

無台と有台の2種があり、まず無台のものでは、2は口径11.9cm、高さ3.7cm、淡い青灰色を呈し、内外ともにナデ調整、底部は渦巻状にヘラ切りの痕跡がみられる。9は口径12.4cm、高さ3.6cm、暗灰色を呈し、丸みをもった底部からやや内彎して口縁に至る。底部は回転糸切りである。10は口径12.8cm、高さ3.8cm、平底の底部から斜め上方に直線状にのびて細くおわる。底部は中央にかけて厚みを増し、外面に「十」と読める墨書を有する。側面は暗灰色、底部のみ灰褐色を呈す。



第2図 主要遺構配置図 (1:2000)

有台の杯では、底部から体部に移行するあたりにやや膨らみをもち、高台が外に張り出すのが目につく。(4、7、12)12は口径13.4cm、高さ3.5cm、外面は灰色を呈す。4は口径15.0cm、高さ5.0cm、内外面ともに特に白い色調が目を引く。1は口径17.1cm、高さ5.0cm、灰白色を呈す。底部は回転方向のケズリで、他の杯に比べて高台がやや細く長い。7は口径19.0cm、高さ4.4cm、胎土は緻密で全体が灰色を呈する。

2. 椀

5は佐波理椀を模した椀である。(1)口径18.6cm、高さ6.2cm、体部下方は丸みをもち、内彎気味に立ち上がって体部に至り、口縁部は外反して端部が丸くおさまる。中位やや下に明瞭な沈線をめぐらす。

3. 蓋

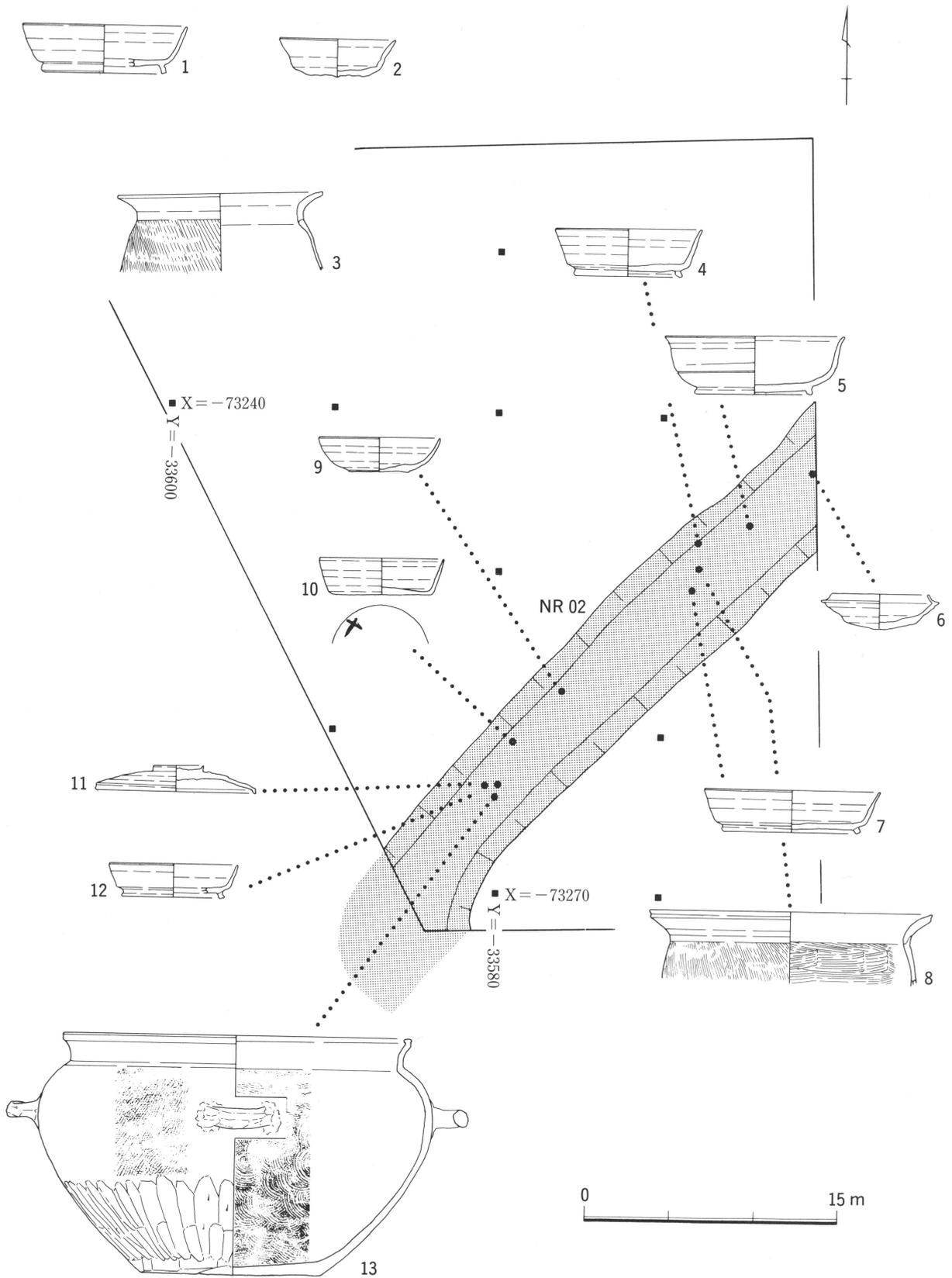
11も5と同様、金属器を模した蓋と思われる。(2)口径16.5cm、高さ2.7cm、紐は環状で端部が特に細く鋭く、肩には微かな稜をもつ。

4. 甕

13は口径35.6cm、高さ24.5cmであり、内外とも白色に近い灰色を呈する。平らな底部から内彎気味にのびて胴部をなし、強く内側へ曲がって肩部を形成する。口頸部は内側がやや肥大する。肩部2箇所半環状の取っ手をもち、外面下半部はタテ方向の削り、肩部側面は工具によるタタキ、内面にも当て具の痕跡を明瞭に残す。

土師器甕では、3は口径20.2cm、内面に僅かにススの付着がみられる。8は口径29.2cmで外面には細かいハケメが明瞭である。胎土は緻密であり、焼成も良好で明褐色を呈する。

これらの遺物の年代観は概ね、NN-32号窯式期に併行する資料を中心とした7世紀半ばから8世紀初めにあたる時期が考えられる。(3)時期差はそれほどみられない。遺物は完形品の割合が多く、



第3図 NR02遺物出土地点（遺物縮尺1：6）

砂層で検出されたにも拘らず、殆ど摩滅していない良好な状態であった。したがって溝が遺物と共に一挙に埋没した状況が窺われる。

N R02の出土遺物全般に共通する印象として、特に胎土が精良で調整に全く粗雑感のないことがあげられる。一般に金属器を直接模倣した器形には特に丁寧な調整が施されていることが多く、ここでも実際に出土遺物中の椀、蓋などは原形となる金属器が推定できるタイプであった。

S X10 (第4図)

S X10は平均して幅80cm、深さ20cm程度の浅い溝S D15、16、17とこれらに区画された長方形プランで構成される。これは、先述したN R02が完全に埋まった面の上で検出された。長辺の方向はほぼN R02に一致し、幅もN R02の幅に丁度収まる。溝で区画された内部には、12×4m厚さ18cmのやや粘質の黄褐色シルトがあり、基壇状に人為的に充填されたようにも見受けられた。

遺物では後述する銅椀蓋片がS D16付近から、須恵器の小形壺2個体と長頸瓶の頸部1点、灰釉椀の小片などが区画内部から出土した。

これらの須恵器は、N R02出土遺物より若干新しい様相をみせ、いずれもほぼO-10号窯式期に併行する資料と考えられる。小形壺は頸部を欠いており、とりわけ2の欠損部周辺には人為的なものか区別できないが、打ち欠いたような剝離の痕跡がみられた。

なお、S X10の周囲ではこの時期に相当するその他の遺構・遺物は希薄であった。

ところで、これらの須恵器の供給地の一つとして考えられる尾北窯は、その特徴として強いていうならば猿投窯と比較して宗教的色彩の強い特殊な器物生産の比重がやや高いことが指摘されている。⁽⁴⁾出土須恵器でみられた傾向が生産地の特性あ

るいは遺跡の性格をどのように反映したものであるのか、今後の検討課題として興味深い。

考察

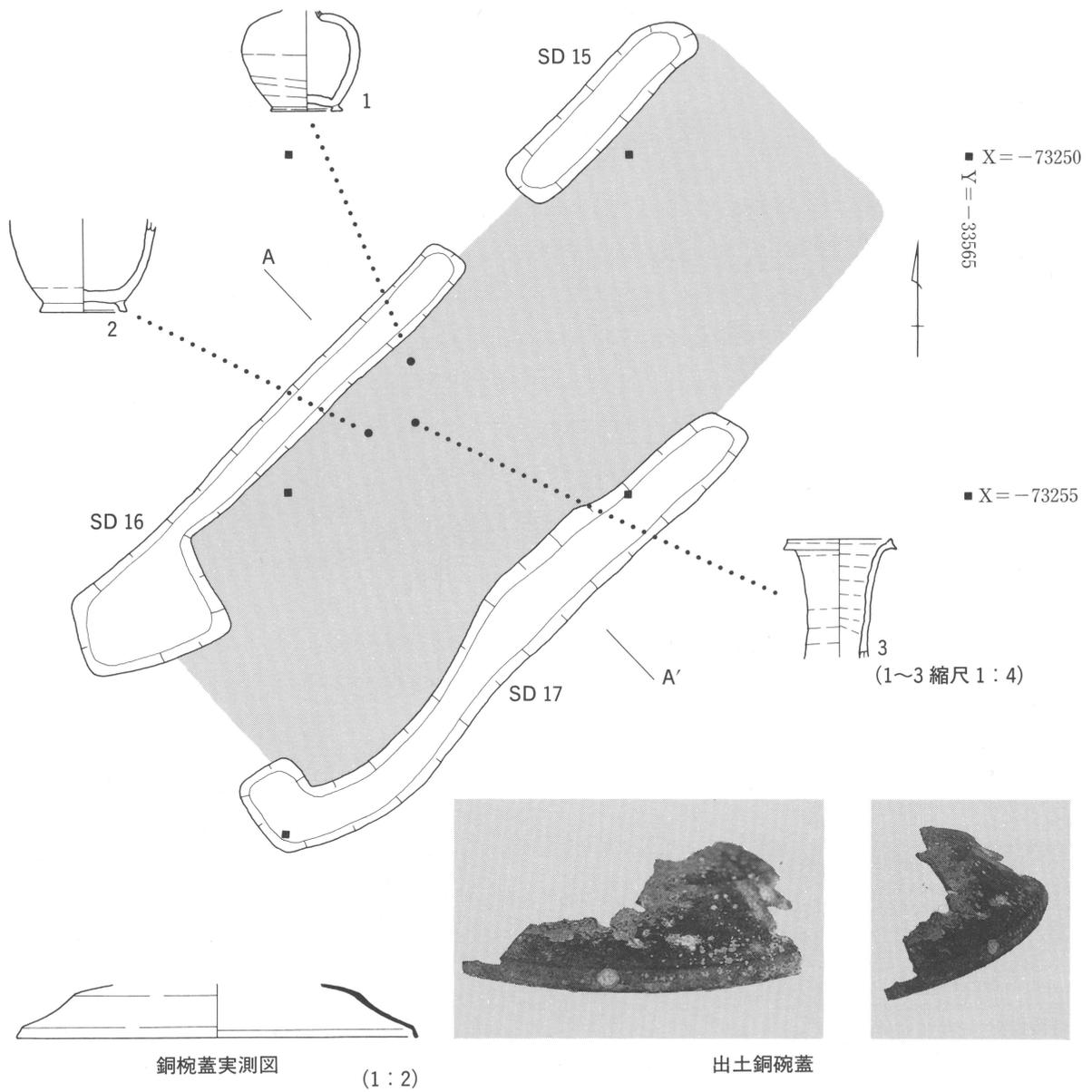
ここでは、出土銅椀の解説を加え、以上の成果とあわせて遺跡の全体像について考えてみたい。

I. 出土の銅椀蓋片について

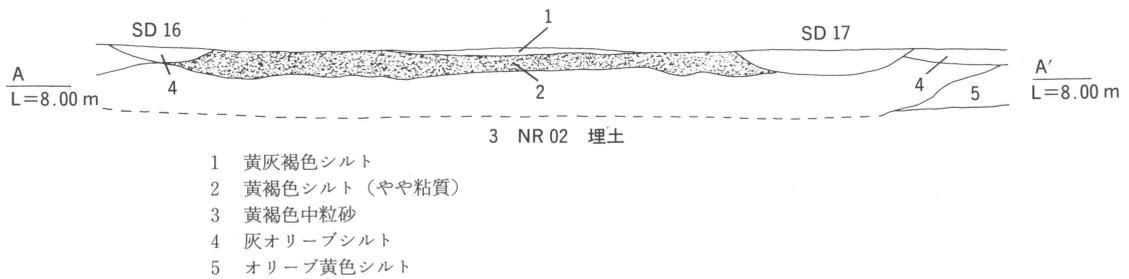
包含層から出土した銅製の蓋は、鑄造製で表面はロクロ仕上げにより平滑である。口径11.5cm、残存高1.6cm、外面中位に稜をもち、天井部は失われているが、おそらく環状の紐をもつタイプであったと思われる。この銅蓋とセットとなる椀身もやはり稜をもつタイプ、すなわち緑釉稜椀の形態に類するものを想像したが、⁽⁵⁾稜をもつ銅蓋では法隆寺献納宝物の響銅製蓋椀の優品が知られている。⁽⁶⁾これとセットになる椀身は腰部が稜をもって張り、そこから口縁部にむかって外へ開く。このような椀身の類例には、他に日光男体山出土例、⁽⁷⁾興福寺金堂鎮壇具、⁽⁸⁾長崎県矢立山古墳出土例⁽⁹⁾などがあるが、いずれも蓋の残存例がないため判断材料に乏しい。毛利光氏の銅椀の分類・編年によると、このような稜をもつ椀身は後出のタイプで、7世紀末から8世紀前半の時期が想定されている。⁽¹⁰⁾

このような金属器は、後期古墳の副葬品のほか、8世紀以降奈良時代から、寺院の金堂、塔などの建物の基壇から出土した事例が多く知られている。これは、地鎮・鎮壇の儀式に於いて、建物築成途中の基壇や塔心礎に埋納される舍利や貴金属などの供養物の容器として用いられるもので、法隆寺、太田廃寺(大阪府茨木市)などが銅椀安置法の明かな具体的資料である。⁽¹¹⁾東海地方では、7世紀後半代に建立されたといわれる山田寺(岐阜県各務原市)の例があり、ここでは塔心礎中央に穿たれた舍利孔から銅製有蓋椀が発見されている。⁽¹²⁾

大毛池田遺跡では明確な建物跡は検出されな



第4図 S X 10遺物出土状況 (1 : 100)



第5図 S X 10断面セクション (1 : 50)

ったが、一片とはいえ銅椀のような特殊な遺物が検出されたことは注目に値する。また須恵器全般にみられた特性、金属器模倣の器形を含むことなど遺跡周辺の特殊性を特に際立たせる材料といえよう。

II. NR02・SX10の性格について

NR02出土の遺物は、すべてが溝の底で検出され、全くローリングを受けていない良好な状態であった。出土状況からするとこの溝では激しい水流があったとは考え難く、また遺物は人為的に投棄された可能性も大いに考えられる。

NR02とSX10出土遺物の時期差は、編年では半世紀程の幅に収まり非常に近接することから、前者が遺物を含んで廃絶した時期はかなり短期間に限定することができる。さらに、SX10がNR02の方向をほぼ踏襲していることもこの状況を補強する。

検出された遺構は後世の洪水によって大幅に削平されており、SX10では建物跡の痕跡を判断することはできなかった。しかし、出土した遺物は宗教的色彩の濃い銅椀蓋片やミニチュア壺であり、これらを伴う何らかの特殊な建物、施設が周辺に存在した可能性がまず考えられよう。NR02も検出状況、遺物の検証からSX10と関連するものであった可能性は高く、付近に存在が推定される特異な空間を区画する溝、すなわち寺院や官衙などの施設に付随するものではなかっただろうか。

まとめにかえて

今回の調査では、直接に遺跡の性格を決定づけるに十分な根拠は得られていない。ただ、以上の成果から類推するに、近辺には一般の集落とは異なる特異な空間が展開する可能性を考えられよう。

近辺では、継続して調査が予定されていることもあり、想定される特殊な空間を構成する具体的

な施設、これを所有する集落の確認は、今後の課題として特に注目してゆきたい。

本稿を草するにあたり、赤塚次郎氏、尾野善裕氏、城ヶ谷和広氏、服部信博氏には多くの御教示・助言を頂きました。感謝の意を表します。

註

- (1) 老洞古窯群第1号窯出土の椀B類に類似する。岐阜市教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981／稲田山北第12～19号窯出土椀にも腰部に1条の沈線をめぐらす同様の椀がみられる。『各務原市史』
- (2) 註(1)椀B類に対応する。岐阜市教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981
- (3) 榑崎彰一『猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会1958
- (4) 城ヶ谷和広「尾張猿投窯と尾北窯～飛鳥時代に見られる須恵器生産の様相～」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報』1993
- (5) やや時期を下る緑釉椀は底部から斜め上方に直線状に立ち上がり、腰部で鋭い稜を形づくる。名古屋考古学会 増子康真編『名古屋市熊ノ前古窯址群』1984
- (6) 阪田宗彦「法隆寺の佐波理遺品」MUSEUM 280 1974／中野政樹「法隆寺献納宝物響銅加盤」MUSEUM 114
- (7) 日光二荒山神社編『日光男体山一山頂遺跡発掘調査報告書一』1963
- (8) 文化財保護委員会『国宝図録』第7集 1961
- (9) 毛利光俊彦「古墳出土銅椀の系譜」考古学雑誌 64-1 1978
- (10) 9の編年による。その後『古墳時代の研究』（雄山閣1991）に稿を改めたものがある。
- (11) 上原真人「繩生庵寺出土舍利容器に関する若干の考察」『繩生庵寺発掘調査報告』朝日町教育委員会 1988／姜友邦「韓国古代の舍利供養具・鎮壇具」仏教芸術 200 1992
- (12) 高台付きの有蓋椀。口径10.3cm、全高13.4cm、椀身、蓋ともに半球状で、蓋には宝珠形つまみをもつ。国指定重要文化財。『岐阜県史』通史編 原始